

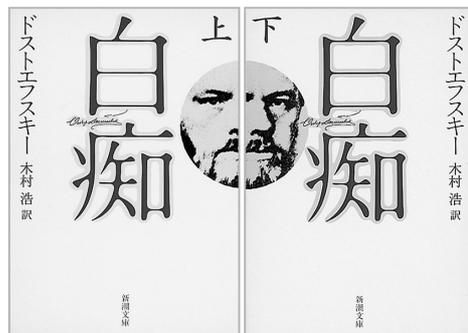
最近,おもしろかった本

『白痴』(上・下)

ドストエフスキー 著 木村浩 訳
新潮文庫 上: 900円・下: 860円(税込)

人間の美しさとは何だろう？
最高級「するめいか本」は嚼むのも一苦労

会員 原 紀子 (61期)



それにしても、この本は長い。新潮文庫で上下巻2冊だが、何遍読んでも読み切るのに丸一日かかってしまう。つまり、弁護士業と両立するには非常に不向きである。しかも読み返せばその度に新たな発見がある。一言一句にハッとす。噛めば嚼むほど、のするめいか本だが、世界最高級のするめいかだと思って欲しい。最高級するめいかは、嚼むのも一苦労なのである。

ドストエフスキーは、本書を書く際、「この長編の主要な意図は無条件に美しい人間を描くことです。(中略)キリスト教文学に現れた美しい人々のなかで、最も完成されたものはドン・キホーテです。しかし、彼が美しいのは、それと同時に彼が滑稽であるためにほかなりません。」と語っている。

確かに、主人公ムイシュキン公爵は、美しく、『救われない男』である。その美しさがもたらす哀愁と滑稽みに、登場人物と読者が共に同情することで、彼は一人の血の通う男性でありながら無条件に美しい人間の一つの在り方として、生き生きと息づく。

彼が持つような子供の感受性を、大人の社会に持ち込んではいけない。その表面性と利己性に、子供の感受性は耐えられない。「もう子供ではいられない」と人はよくため息をつくが、そのため息には、現実を生きていくために自分の中の美しいものをあえて殺さなければならない悲しみが詰まっている。

ところで、もしムイシュキン公爵に「白痴」性が無かったら…きっと相当のドン・ファンになっていたろう。人は社会的欠点の自己肯定によってこそ、本当に「美しい人間」に育ちうるのかもしれない。

ドストエフスキーは、自分の気に入った主人公達を決して幸せにしない。とことん不幸のどん底まで追い込む。無類のSである。苦しみはそれを負い得る者の背に…というが、ここまで悩ませて不幸にしないで、と思うのは私だけだろうか。

もっともその結末があつてこそ、改めて読者は深く考え込み、再度本を開くことになるのだが。

ちなみに、黒澤明監督による本書の映画化作品も味わい深い。